

平成 2 4 年度
広島市専門家評価
評価報告
(二葉中学校)

平成 2 5 年 3 月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校1校と広島市立中学校2校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年11月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成25年3月

広島市学校評価システム 専門家評価

評価委員会 委員長 林 孝

副委員長 高妻 紳二郎

副委員長 曾余田 浩史

I 評価目的

「人間関係づくり」を基盤とした学習指導と生徒指導の一体感ある授業づくりやその指導の在り方とともに学校運営の状況について、専門家の立場から客観的評価に基づいた助言の提供により、学校改善の具体的な方向性を示す。

II 評価項目

- (1) 学校運営の状況について
- (2) 教職員の状況について
- (3) 生徒の状況について
- (4) 家庭・地域と学校の関係について

III 評価方法・作業

1 評価手法

今回の評価方法としては、「II 評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員等からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2 データ収集方法

データ収集対象	方法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
生徒	授業等の観察、グループインタビュー
学校協力者会議委員	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3 作業の経過

時期	内 容	実施主体
4月	・ 専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5～9月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
10月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り (10/9) ・ 対象候補校の選定 ・ 評価委員会 (評価対象校の決定) ※ 電子メールによる会議 ・ 評価対象校から希望等の意見聴取 (10/29)	教育委員会 評価委員会
11～12月	・ 評価委員会 (評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成) ※ 電子メールによる協議	評価委員会
12/3	・ 評価チーム会議 (評価計画、今後の予定) ・ 学校訪問調査 (教職員からの聞き取り、授業等の観察 他)	評価チーム
1～3月	・ 評価チーム会議 (評価報告案作成) ※ 電子メールによる会議 ・ 学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※ 学校訪問による意見聴取 (3/15)	評価チーム
3/5	・ 学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
3月	・ 拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】(評価報告案他)	評価委員会・ 評価チーム

4 評価者 (評価チーム)

チーフ (評価委員)	高妻 紳二郎 (福岡大学 人文学部 教育・臨床心理学科 教授)
評価専門委員	財津 伸子 (比治山大学 非常勤講師、元 中学校長)
評価専門委員	瀧口 典子 (元 中学校長)

Ⅳ 評価報告

1 評価・分析結果の概要

【総合的な評価と改善の方向性】



本校は約10年前からみられる生徒指導困難状況から脱しつつあり、平成21年度から授業研究会もスタートするなど、徐々にではあるが落ち着いた教育機関としての役割を果たそうとする努力が強く見られ始めている段階にあるといえる。

この傾向は、教職員間で生徒指導上の難点を列挙して危機感を共有し、それぞれ臨床的生徒指導にあたるという他の地域では多用される方策をあえて採らず、「すべての授業において関心や意欲が持て

る授業改善のためにペア学習、グループ学習を取り入れた協同学習」を展開したいという校長の強い意志によって強められつつある。校長によるこの経営方針は、学校の総合的な教育力は教員一人ひとりの授業力向上にまつものであって、対症療法的教育に追われるばかりでは個力の向上が期待できないという意味においてまっとうな戦略であり、中長期的な視点では高く評価できる。

本校の現状に目を向ければ、特に2年生、3年生の一部の生徒において学習に対する態度や意識が弱く、それは授業中に廊下すら立ち歩く生徒の様子や教室内の整理整頓がなされているとは言い難い状況からも看取されるところである。しかしながら少人数教育を切り口にして、学習規律を回復させようとする教員や、目立つ生徒だけにとらわれず一定数は存在する穏やかな生徒への教育効果をいかに図るかに腐心している教員もあり、そうした教員の姿勢はとても大切である。このように、本校では目の前の生徒指導上の諸課題に追われながら、日々の授業をこなし、かつ、校務分掌についても支障なく遂行されていることは評価できる点である。

また、職員の半数近くが常時連絡を授受できる体制を構築しており、迅速な対応が可能となっている。ただしかかる体制はいわば緊急避難的な措置であって、年間を通して果たして必要不可欠なツールであるか否かについては再検討の余地もある。職員による指導体制と並行して校内には特別支援のサポーターも常駐し、職員の目が届かない箇所についてもきめ細やかなサポートがなされていることは特筆できる点である。同じ学年・クラス間の協力体制もある程度できており、ベテラン教員から若手教員へのサポートも適切になされている好事例もみられる。このように、厳しい生徒指導状況や未整備の授業環境に振り回されることなく、一定の落ち着きをもった教職員による指導体制ができており、限られた時間のなかで職責を全うしようとしている姿勢もうかがえることには敬意を表したい。

しかしながら、すべての教職員が校長の示す経営方針を理解し、その趣旨を汲んで日々の教育活動にあたっているとは言い難い状況が見られる。これは、校長から教職員に対して行われる意欲的な情報発信や多様なアイデアの提示が、教員にとって職務を進めていく上で対処することが難しい場合があるからである。

したがって、「二葉中学校の弱みと強み」を教職員で共通認識し、学年を核とした今あるチームワークで「強み」をさらに伸ばし、目の前にある指導課題にひとつずつ丁寧に対処してほしい。さいわい、どの学年もサポートをしあえる体制が構築されており、あわせて決して「学年セクト」ではなく、他学年の努力をお互いに認めている状況も見受けられる。上記したよう

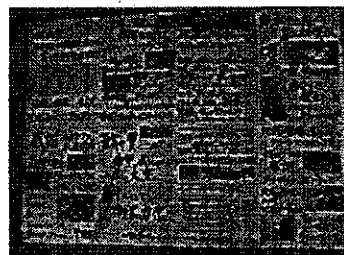
に、課題が多くみられる2、3年生担当教員の努力や取組をお互いに評価する風土も構築できている。したがって、結果や成果をすぐに求めるのではなく、2年若しくは3年間にわたる中長期的なPDCAサイクルの回転を意識し、現状と課題、目標と方策を教職員で共有することがこれからいっそう大切となる。

以上を踏まえると、現在の本校の教職員の努力をより生かすためには、次のことについても、取組を検討していくことが望ましい。

- ① 地域関連の行事「まちぐるみ教育の絆プロジェクト」をさらに継続・深化させるための次年度、次々年度の取組について検討すること。
- ② 授業規律を徐々に確立させていくためのロードマップを作成し、全教員で共有すること。
- ③ そしてこれらの取組にあたる教職員の努力、ないしは成果について適切に評価する支持的な学校風土をさらに発展させること。

【学校運営について】

○ 学校経営について、校長は強い意志を持ち、情報発信と自らのプレゼンテーションを通して夢や思いを示そうとしている。校長のビジョンが、より一層教職員に浸透するよう、説明の仕方等について、工夫を継続する必要がある。また、次年度に向けて、校長が学校経営の方向性を語り、教職員と共有する際には、達成可能で検証可能な経営目標を設定して提示することが大切である。



○ 生徒の家庭背景に問題を持つ生徒が多いけれども、地域の協力もあって安定した学校の雰囲気になりつつある。教頭が校長の補佐をしっかりと行っていることにより、そうした望ましい学校マネジメントが機能しているため、次年度もぜひ継続してもらいたい。

【教職員について】

○ 全体として教職員のチームワークはよいが、目の前の生徒指導という難事が頻発し、一部の教室での授業を担当する教員には授業中でも落ち着きのない生徒にその場その場に応じて、適切なタイミングで効果的に指導していくことが求められる。学校行事や生徒会活動を通して生徒たちが変容することを実感として持っている教員も多く、単なる規範指導に加えて、生徒会活動の活性化を図り、学校行事等を利用した生徒指導を検討する必要があるだろう。



○ いわゆる「手がかかる子」はもちろんのこと「がんばっている子」にもしっかり目を向けていたいという思いを持っている教員も多いことに加えて、第1学年では教室環境を学年で統一するなどの工夫もみられる。こうしたアイデアや工夫を出すことができる力がある教員、潜在力を持つ教員を活かすことを考えなければならない。

- まちぐるみ「教育の絆」プロジェクトにおいて、放課後学習会、夏休み学習会に取り組み、基礎学力の定着を図っていることは高く評価できる。
- 生徒指導上の諸課題に追われながら、日々の授業をこなし、かつ、校務分掌についても支障なく遂行されているとともに、各分掌で自分の考えが生かされ、反映されていると、多くの教職員が感じていることは本校の支持的風土（＝よさ）であって、学年間においてベテラン教員から若手教員へのサポートも適切になされていることとあわせてさらに発展させてもらいたい点である。

【生徒について】

- 学校行事への主体的参加や地域行事への貢献度も高くなってきている。そうした体験の満足度も高い。生徒会執行部などには、自分たちの学校という意識がしっかりあり、その中にはむしろやり残したことも多いという生徒もいた。全体的に学年間、男女間の仲がよくみえるものの、生徒間の言葉づかい（敬語の使用）が乱れていることを憂慮する声もある。
- 全体として素直で表裏のない性格の生徒が多い。授業への主体的参加も、教師の発問や説明の方法によって左右されている。少人数でも指導困難なクラスもあれば大人数でも規律が保たれているクラスがある。ただ、授業中多くの通学鞆が床におかれた状態であるなど整理整頓ができていないことは早急に改善すべき点であろう。教科書など授業道具の準備ができていない状態にあることも同様である。
- あいさつは多くの生徒がするものの言葉遣いや態度（ポケットに手を入れたままの生徒や顔を見ないであいさつする生徒が目立つ）に難がある。授業中の教師との会話や廊下での会話においてもけじめがついていないと言いはしい。廊下を走る姿も見られるし、下足場の整頓もできておらず掃除時間も騒がしい、といったように全体的な規律の欠如がみられる。



【家庭・地域と学校の関係について】

- 地域を代表して本校に関わっている住民や保護者（PTA関係）の学校に寄せる期待には高いものがある。「まちぐるみ『教育の絆』プロジェクト」において、放課後学習会の取組や「クリーンマイタウン二葉」として地域清掃活動を行っていることはぜひ本校の伝統としてもらいたい。一方、教職員の異動によりせっかく築いた関係がリセットされてしまう事例もみられ、地域からは継続的努力と貢献の困難性が指摘されるなど、とくに生徒指導面に関していえば報告・連絡・相談を大切にし、ぶれることのない学校方針の構築が求められる。



2 意見・提言

評価チームは、上記の評価・分析結果に基づき、二葉中学校及び教育委員会に対して、次のとおり意見・提言する。

(1) 二葉中学校に対して

二葉中学校の評価は上述の通りだが、以下では意見・提言として「学校運営」、「教職員・授業」、「生徒指導」、「家庭・地域との連携」の4領域に分けて記述している。

学校運営

- 校長の経営方針が教員一人ひとりにより一層伝わるよう、校長は、本校の組織マネジメントの方針をさらにシンプルに示すことが必要である。特に達成可能な具体的な目標を「生徒の姿」として示すことが重要である。
- 職員一人ひとりの自己申告書作成のプロセスにおいて自分や生徒が直面している課題の解決につながっていくことがどの程度意識されているのかわからないことから、管理職が学校経営目標をしっかりと提示し、教員はこの学校経営目標を踏まえた個人目標を設定する必要がある。
- 短期経営目標の「成果指標」と「努力指標」に取り上げたことについて、職員の実践を検証する機会を設けること（例えば校長や教頭による授業観察、それに引き続いての支援的助言）を考えてよい。その際、管理職による面談の内容・方法を再検討し、校長の思いが結果として自己申告書に反映されているかどうか確認をすることが効果的である。

教職員・授業

- 職員室の入り口に壁が設置されているなど職員室の個室化が進んでいるような印象を与え、閉鎖的な感がぬぐえない。また、廊下の掲示物が豊富とは言えないことに加えて、掲示されているポスター等についても期間が過ぎた物も貼られているなど掲示に関する意識を全般的に高める必要がある。職員室を開放的雰囲気に変えることを工夫するとともに、掲示物、学級整備などを学年会の協議内容に入れるなどの取組が望まれる。
- したがって、教室内の掲示物に目的を持たせるとともに、生徒の目線に立つての掲示情報を振り返る機会を設けることが早急に求められる。あわせて、廊下にゴミが落ちているなど身近な美化活動を推進する必要があることから、保護者のボランティアとともに、環境整備を実施するとよい。
- 例えば1階の廊下にあるほこりがかぶったロッカー等を有効利用することはできないだろうか。若しくは撤去する等の措置が望まれる。ひとつのアイデアとして小学校を訪問し、環境整備の大切さを実感することも考えられる。

- 短期経営目標の評価指標にある「本時のめあて」シートの活用、協同学習などを意識した授業に変わりつつある。今後は、授業の中での振り返りを重視し、生徒がどこまで理解して何を課題にしているのかを日々把握することに、意を用いることが大切である。これらの実現のためには教員が切磋琢磨する環境をつくる必要がある。継続した講師の招聘、研究指定を受け、定期的、継続的な授業公開に取り組むことなどが大切である。
- 課題を抱えた生徒だけにとらわれず穏やかな生徒への教育効果をいかに図っていくかが大事な点である。体育大会や文化祭など現在、二葉中が自慢できるものを更に伸ばしてもらいたい。その際、教師と生徒の間に親しさと節度を区別させる習慣づくりもあわせて意識してもらいたい。

生徒指導

- 上述のように、二葉中の生徒像（どんな生徒に育てるのか）を教員が共有化し良さを伸ばす取組を進めていってもらいたい。教師主導ではなく、いじめ没滅キャンペーン、授業前の着ベルと机そろえなどの生徒会の取組につなげていくことが大切である。

組織

- 生徒指導の方針を共有することが何よりも必要である。報告・連絡・相談を大切にし、ぶれることのない具体的な学校方針を決めておかなければならない。
- 生徒会執行部と話し合い、教師と生徒の間で身近な約束事（例：あいさつ、掃除、授業規律等の身近なきまり）を3点程度決定することが望ましい。そして、普段からまじめに取り組んでいる生徒が目立つ生徒会となるよう、職員の積極的な支援も欠かせない。
- 3年後（高校）を意識させ、正しい接遇について生徒会を中心に取り組んでももらいたい。適切な規律を習慣化するために、部活動を通し指導していくことも考えられる。実践している他校から学ぶ（生徒が他校の生徒から学ぶ）という視点も持ってもらいたい。そうすることにより、人や物に対して感謝する気持ちを学び、生徒の意識が高まっていくことが期待される。
- 授業前の構え（環境整備、授業準備）を授業担任が必ず行うこと。

家庭・地域との関係

- 現状を「学校だより」等により保護者はもちろん、地域にしっかりと周知させたくうえで協力をあおぐ必要がある。
- 生徒指導面に関して、保護者や地域住民が戸惑うことがないように、ぶれることのない具体的な学校方針を決めておかねばならない。

(2) 教育委員会に対して

広島市教育委員会に対しては、以上のような二葉中学校の現状にかんがみ、以下のような支援が強く求められる。先に意見・提言したように、二葉中学校の望ましい発展を促進するためには不可欠な支援であるため、ぜひ段階的に実現してもらいたい。

二葉中学校の立地事情を勘案した支援

- ① 多方面からの視察もあり、本校を取り巻く事情は関係者に広く理解され、関心も高まるようになってきている。幸い、地域による学校支援が活発化してきており、保護者や地域住民の協力も得やすくなっている傾向にある。引き続き、教育行政からの財政的にバックアップが望まれる。来年度、ぜひそうした取組や成果について、広く市民に向けてアピールする必要がある。
- ② 本校が現在の状況をさらにいい方向に変容させるための継続的な指導が必要である。教室環境の整備も学校任せにせず、例えば指導主事が市内の多くの好事例を本校に示すことにより、具体的な目標を与えることも考えられる。

人事・予算上の配慮

- ① 生徒指導方針のぶれが生じないようにすることを前提に、今後も、本校に対して生徒指導の経験が豊富な職員を配置するとともに、授業改善の核となるミドルリーダーの配置が必要である。
- ② 規律定着に資するため、部活動を活性化させる必要がある。したがって部活動指導にも熱意をもった教員の配置と必要な備品の整備が望まれる。